リシャール・シモンとボシュエ（1）
『旧約聖書の批判的歴史』の発禁処分に至るまで

伊　藤　玄　吾

序

近代の歴史批判的聖書研究のさきがけとなった著作『旧約聖書の批判的歴史』*L'Histoire critique du Vieux Testament*によってその名を知られるリシャール・シモンRichard Simon（1638 － 1712）については、彼がその生を受け、また生涯に亘って活動の場としたフランスという国の思想史、文学史、宗教史においては、17世紀当時から現代に至るまで、ごく小さな扱いしかなされないのが常であり、その著作群に関する研究も極めて数が限られている[1]。パスカル、ボシュエ、フェヌロンなどの作家に代表されるように、17世紀から18世紀にかけてのフランスの文芸、哲学、神学、社会思想が常に聖書という聖典との緊張関係に置かれ、様々な論争を経て進展したことを考えると、このリシャール・シモンの軽視はあらためて奇妙に感じられ、このことが逆にフランスの文芸や諸思想もしくは宗教的感受性のある種の特性を明らかにするのではないかと思わずにはいられない。

リシャール・シモンの仕事がフランスの思想においてそれほど大きな影響を及ぼすこともなく、またフランスにおける聖書学の進展に大きく寄与することもなく、また彼が試みた聖書のフランス語訳が文人たちの創作を刺激することもなかった理由は何であろうか。まず、単純な理由としてあげられるのは、『旧約聖書の批判的歴史』をはじめとするシモンの聖書学関連の著作の大部分が当時のフランスで出版禁止となったことである。しかしフランスで出版禁止になっても、間もなくオランダで出版された[2]だけでなく、英訳[3]やラテン語訳[4]も出ており、知識層にとってはその気になればそれらの外国

『言語文化』14-4：313－351ページ　2012.
同志社大学言語文化学会 ©伊藤玄吾

の版を手に入れることはそれほど困難なわけではなかった。しかしそれがこの種の書物に対して本来期待されるほどには積極的になされなかったことは何を意味するのであろうか。

この件を考察する上で極めて深刻かつ複雑な問題は、シモンの著作の出版禁止を指揮した人物が、当時のフランスの宗教・政治界において決定的な影響力を持っていたのみならず、フランス文学史においても古典主義時代の雄弁・美文を象徴する代表的作家として評価の高い、ジャック＝ベニーニュ・ボシュエJacques-Bénigne Bossuetであったことである。ポール・アザールは『ヨーロッパ精神の危機 1680-1715』の第2部第4章をボシュエに充てているが、その冒頭において、フランスの文学的伝統におけるボシュエのイメージを、些か皮肉を織り交ぜながら次のように記している。

> ボシュエというともっぱら、リゴーの絵にあるような威風堂々たる姿が目に浮かぶ。あの威容をこと新しく持ち出すのはいかにも陳腐なことではあるが、これも必要な手続きだからいたしかたない。ボシュエの名文、その壮麗さ、その輝きが、私たちの目にいつまでも焼きついているからである。文章ではなくて、棺前演説をする弁士の姿でもいい。その声が流れはじめると、私たちは崇高な世界へ運ばれていくような気がする。声は次第に高まって、聞き手の魂に苦しい程の深い反響を呼びおこす。すすり泣きや嘆息があちこちから洩れる。そして、この聖なる音楽が墓のあなたへの讃歌をもって終る時、私たちは人間を超えた世界に生き続けてきた予言者の声と、神の使者の声を聞いたような思いがする[5]。

もちろん、ポール・アザール自身がこの文章の直後に指摘し、またボシュエをめぐる多くの研究が示すように、そのような文学的イメージがボシュエのすべてではない。しかしながら、彼の文学的な才能の輝かしさが、そしてその威厳に満ちたイメージが、彼によってフランスの知的世界から事実上葬り去られてしまったリシャール・シモンの重要な著作群の影をさらに一層薄くしてしまったことは否定できない[6]。

後の19世紀に、ドイツにおける近代聖書学の驚くべき発展を目の当たりにしたフランスの聖書学者たちがリシャール・シモンを「再」発見した時、彼のような偉大な学者を持ったフランスが聖書研究においてこれほどまでに立ち遅れてしまったことを嘆き、漏らした言葉は次のようなものであった。

> ボシュエが、ラ・レニー[7]を補佐として、その後の数世代にわたるフランスの聖書研究を殺してしまった[8]。

この言葉を記したエルンスト・ルナンがさらに続けて言うには、ボシュエはリシャール・シモンを迫害することでフランス教会を守りおおせたと信じたのだったが、逆にヴォルテールのような人物の到来を招くことになってしまった、つまり、シモンの提案したような真剣で自由で重みのある研究を拒絶したことで、冷笑的で表面的な不信仰の形を作り出したのであり、まさにヴォルテールがシモンの仇をとるかたちになったのだと述べる[9]。もちろんこの発言は些か誇張されたものだが、リシャール・シモンの著作群、とりわけ『旧約聖書の批判的歴史』に取り組み、また発禁後のボシュエとの長年にわたるやりとりに関する記録を少しでも読んだ者は、ルナンと共にある種の悲痛に似た感慨を抱かずにはいられないだろう。

なぜリシャール・シモンの行なったような研究の方向性がフランスでは断ち切られたのか、それを阻んだものは本質的には何であったのか、を問うことによって、そこから逆に17世紀後半以降のフランスの思想や言説空間の特異性を浮かび上がらせることになるのではないか、というのが本研究の出発点である。その際、リシャール・シモンとボシュエの関係を、タイプの異なる二人の知識人の間の心理的な葛藤として小説的に描くのでもなく、かといって宗教・政治的力学の視点によって整理しきってしまうのでもなく、また単なる思想史の観点からでもなく、文体の問題および翻訳の問題を十分に考慮に入れた文学史的な視点を取り入れて論じ直すことが重要であると思われる。

リシャール・シモンとボシュエの間の緊張した関係は1704年のボシュエの死に至るまで続く。ボシュエからの様々な圧力にも関わらず、巧みにその批

判をかわしつつ新たに「危険な」研究を発表し続けたシモンは、ボシュエにとって生涯に亘る頭痛の種であった。というのもシモンは、カトリックの信仰を堂々と表明し、ボシュエも認めざるを得ない才能豊かな学者である一方で、ボシュエの全生活のそして全活動のよりどころであった聖書の権威、ひいては教会の権威を不用意に揺るがしかねない人物であったためである。

『旧約聖書の批判的歴史』以降ボシュエの最晩年に至るまでの年月は、しばしば双方からの歩み寄りがあったとはいえ、結局は両者の対立点がますます明らかにされ、殊に本質的な点に関しては妥協が困難であることがより明確になっていく過程でもあった。本研究では、シモンとボシュエの約25年間にわたる対立の過程を大きく四つの時期に分けて論じていきたい。まず、第一にシモンとボシュエの最初の対立が生じた1678年の『旧約聖書の批判的歴史[10]』発禁前後の時期、第二に『旧約聖書の批判的歴史』以降、幾多の論争をへて、シモンが次の目標であった新約聖書の検討に移り『新約聖書のテクストの批判的歴史[11]』、『新約聖書の諸翻訳の批判的歴史[12]』、『新約聖書の主要な注解者たちの批判的歴史[13]』を執筆、再び発禁処分を受けるに至るまでの時期、第三にそれらの著作に対してボシュエが『伝承および聖教父たちの擁護[14]』などを通して正面から反論を試み、シモンが様々な形で弁明を行なっていった時期、そして最後に、シモンが関わった新約聖書のフランス語訳、いわゆる「トレヴー聖書[15]」の出版禁止（1702年）へと至る時期を順に取りあげて論じていきたい。紙幅の都合上、本稿では上で示した四つの時期のうち、『旧約聖書の批判的歴史』の発禁事件をきっかけにリシャール・シモンとボシュエの間に最初の対立が生じるまでの第一期を扱い、今後順次発表する予定の論考において第二期以降の問題を扱うことにする。

1. リシャール・シモンとボシュエの対立を考える上での主要な論点

リシャール・シモンとボシュエの関係について我々が問題にすべき点は多岐にわたるが、ここではそれらを大きく四つに整理したい。もちろんその四つは互いに密接に関わり合うものである。

まず、第一は狭義の聖書研究に関わる問題である[16]。既に15世紀から16世紀にかけての人文主義者たちは、より古い時代のテクストにこそ真の純粋な

信仰の姿が見出されると考え、既存の聖書テクストを厳密に文献学的な手続きに従い批判的に検討する試みを始めていた。とりわけ、聖書第一主義をとる新教側においては、聖書テクストの緻密な文献学的研究が進んだ。それはまた、聖書の自国語への翻訳の問題とも密接に結びついていた。彼等はカトリック教会が唯一認め、教会の権威と教義の礎としたラテン語訳聖書（ウルガタ）から離れ、より原典に忠実な翻訳を目指したのであった。ギリシア語本文を原典とする新約聖書についてはエラスムスが16世紀初頭に『校訂新約聖書』（1516年）を出版したほか、ヘブライ語本文を原典とする旧約聖書については、ドイツのヨハネス・ロイヒリンJohannes Reuchlin、セバスティアン・ミュンスター Sebastian Münsterらの優れたヘブライ語学者の世代を経て、16世紀後半から17世紀前半においてはヨハネス・ブクストルフJohannes Buxtorf父子らが、ユダヤ教徒によって伝承されてきたヘブライ語テクストであるマソラ本文の母音点、アクセント記号に関する詳細な研究を行ない、また17世紀半ばにはフランスの新教徒ルイ・カペルLouis Cappelが『聖書批評、または旧約聖書の各書に見られる異文について[17]』を出版して、ヘブライ語の標準本文が様々な異文や誤記を含むものであることを一覧表にして示したほか、イギリスでも『聖書批評[18]』（1657年）という画期的な聖書注解選集が出版された。こうした聖書本文の校訂の細部に関わる問題とは別に、17世紀初頭から深刻な議論が交わされたのが、聖書の各文書の作者をめぐる問題であった。その中心となったのは、旧約聖書の根幹であり、ユダヤ教そしてキリスト教の信仰の最も重要な基盤をなす「トーラー」もしくはキリスト教徒によって「モーセ五書」と呼ばれる文書群が、果たして全てモーセ自身によって書かれたかどうか、という問題であった。この問題自体は17世紀以前にも存在していたものであったが、17世紀には専門の聖書学者以外からも率直な指摘が行なわれるようになり、西欧の思想界において物議を醸すようになった。イギリスのホッブスは『リヴァイアサン』（1651年）の第3部第33章において、「モーセ五書」の中にモーセ自身が記したとすれば矛盾するような記述が存在すること[19]を指摘していたが、1670年にはこれらの文書のモーセ作者説をさらに徹底的に疑問に付す内容を含むスピノザの『神学・政治論』が出版され、しかもその議論が単なる聖書研究の枠を大きく超え、従来の神学、

政治学の基盤を揺るがすパースペクティヴを持たされたことによって、その後の「モーセ五書」およびその他の聖書の諸文書に関する文献学的研究の現場の緊張感が一気に増すことになった。リシャール・シモンの仕事もある意味そうした先人たち仕事の延長線上に現れたのであり、ボシュエもそのことを十分理解したうえでその問題点を指摘し、猛烈な反論を行なったのである。

第二は歴史批判もしくは歴史批評をめぐる問題である[20]。これは第一の聖書研究の問題と極めて密接に結びついているものでもある。リシャール・シモンの聖書に関する研究には必ず「批判的歴史」Histoire critiqueという語が付けられている。つまり、聖書のテクストそのものの辿った歴史を批判的に考察し、より信頼性の高い部分と、様々な「人間的な原因」によって誤りが混ざり込んでしまった箇所を区別し、より良い本文テクストへ向けて校訂を行なうことが重要とされている。

また既に16世紀後半以降、ジョゼフ=ジュスト・スカリジェ Joseph-Juste Scaligerの古代年代学やサミュエル・ボシャールSamuel Bochardの聖書地理学、またジャン・ド・ローノワJean de Launoyの聖者伝説批判などを通して、テクストの読解における歴史的な視点の導入が盛んになされるようになり、旧来の聖書を中心にした歴史記述の基盤を揺るがすようになっていた。一方ボシュエは、1667年ごろから『世界史論』*Discours sur l'Hisoire universelle*の執筆を開始していた。この著作はもともと王太子ルイの教育のために書き始められたが、その教科書としての役割を終えた後も加筆、修正を続け、カトリックの教義の説明と擁護に貢献するための、歴史的および神学的な総括としての作品となっていった[21]。この作品は旧来の神学的世界観に基づく時代遅れの歴史書としてモンテスキューやヴォルテールなどから批判を浴び、ましてや近代の歴史学の視点からは全く相手にされない作品であるが、我々の研究にとっては、リシャール・シモンの聖書の歴史批判的研究をめぐる論争の中で、ボシュエが如何にこの『世界史論』の中の議論を検討し直し、加筆や修正を行なっていったかを知るのは極めて意義のあることである[22]。

また、聖書テクストの中の歴史記述の秩序に関する問題も重要であった。特に旧約聖書の中には時間軸に沿わない物語の展開が多くみられ、読む側があえて順序を入れ替えて整理しないと話が成り立たないと思われる場合が少

なくない。また、ほぼ同じ内容や表現が続けて繰り返されることも多く、極めて未整理な感じを与える[23]。旧約聖書本文に頻繁に見られるこうした歴史叙述の際の秩序の混乱と記述の未整理の問題をどう説明し、それを自身の聖書理解のシステムにいかに組み込むかが、シモンにとっても、またボシュエにとっても重要であった。詳しくは今後、上で述べた第二期を扱う際に見ていくことになるが、二人は全く異なる方法によってこの問題を解決しようとした。

第三は神学に関わる問題である[24]。あくまでカトリック正統派教義の擁護にこだわるボシュエは、自分の周りに幾多の攻撃すべき敵を見出すことになった。彼が死ぬ直前まで書き続けた膨大な護教論的著作、論争的著作はそのたゆみない闘いの跡を示している。一方にはキリスト教という宗教そのものへの疑いを表明する自由思想家（リベルタン）たちがおり、また一方にはキリスト教の信仰を告白するもののカトリックの教義とその権威を受け入れない新教徒たちがいて、しかも細分化された様々な宗派を形成しており、さらに困難なことには、カトリック陣営の内部にも様々な考え方が生れ、時には互いに激しく対立していた。ギュイヨン夫人そしてフェヌロンによって代表されるキエティスム（静寂主義）のような神秘主義的傾向を示す者たちもいれば、ニコルやアルノーそしてパスカルに代表されるポール＝ロワイヤルのジャンセニスト達、リシャール・シモンのような歴史批判的手法を用いる聖書学者、さらにはシモンと同じくオラトリオ会士であったニコラ・マルブランシュのように理性を重視するデカルト主義的傾向を強く持つ者たちがいた。ボシュエはそうしたすべての相手と論争し、時には強硬な手段に訴えることも辞さなかった。彼の護教論的著作は、ある特定の敵をターゲットにしていても、結局は多方面にわたる非正統派すべてに対して同時に向けられているものであり、また特に論争的性格を前面に出さない追悼演説などの中にも彼の護教論的意図はさりげなく織り込まれており、要するに、彼の神学的立場は彼のほとんどすべての著作の隅々に行きわたっているといっても過言ではなかろう。

一方、リシャール・シモンは神学者ではなく、確かに時にはその著作の中に護教論的な論述を織り込み、カトリックの正統派教義への忠誠や教会の伝

承の権威の重要性を強調することがあるとはいえ、実際のテクスト解釈においては極めて自由かつ批判的に振る舞い、結局のところ聖書本文テクストの字義通りの意味を正確に理解することがあくまでも彼の関心の中心であった。シモンに見られるこうした理論と実践の間の距離は、ボシュエの再三にわたる忠告にも関わらず決して解決されることなく、後の「批判的歴史」著作群に引きつがれ、最後までボシュエを苛立たせることになる。

第四番目は文体および翻訳の問題である[25]。シモンもボシュエも聖書のフランス語訳がどのようにあるべきかをめぐって様々な考察を重ねた。シモンは実際に聖書の新しいフランス語訳の企画に関わったし、ボシュエもさまざまな箇所で聖書の翻訳を行なっている。1702年にトレヴーで出版されたシモンの新約聖書の翻訳は、あくまでも原文にこだわり、原文の字義通りの意味を伝えることを目的としたもので、ギリシア語、ヘブライ語の知識に基づいた比較対照を注にして欄外に示しており、極めて批評的性格の強い翻訳であった。ボシュエはこの翻訳を発禁とするよう働きかけ、一旦は出された出版許可がノアイユ枢機卿の指示で取り消された[26]。もしこのフランス語訳聖書が発禁にならず、多くのフランス語の読者がこの訳に親しんでいたらどうなっていたであろうか。おそらくその後の宗教文学だけでなく世俗文学の文体にもいくらかの影響を及ぼしていた可能性も皆無とはいえないであろう。一方、ボシュエの方は聖書テクストのまとまった翻訳こそ手掛けなかったものの、彼の演説や説教その他の著作のあらゆる箇所に組み込まれた聖書のフランス語訳は、彼独特の文体の重要な一部を構成していた。ボシュエと聖書の関係についての詳細な研究を行なったルネ＝マリー・ド・ラ・ブロワーズは17世紀の作家の中でも聖書テクストの影響が最も大きいのがボシュエであるとしている[27]。さらに彼の文体はカトリック正統派およびフランス教会の導き手としての権威、そしてルイ14世に象徴される絶対君主制の威光に相応しい堂々たる文体とみなされ、フランス語の古典主義的散文の模範としてその後のフランス語文学教育の場で扱われていくことになる[28]。その意味で聖書のテクストはボシュエを通してフランス語の文体に影響を及ぼしたとも言えるのである。

まとめると、我々の研究は、聖書解釈、「批判的」歴史、神学、そして文

学の視点からリシャール・シモンとボシュエの関係を読み解くものである。さらには文献学、歴史研究、神学を含みこむ広い意味での聖書研究と、主に文体論を中心に据える文学的研究という二つの視点からこの17世紀の事件を分析し、その後のフランスの学問や文学への影響を――明白で短期的な影響ばかりでなく、長きにわたる潜在的な影響をも――捉えていきたいと思うものである。

2. リシャール・シモン及びボシュエの出生と知的形成

本稿で問題とする第一期、つまり『旧約聖書の批判的歴史』が印刷され、その直後に発禁処分が行なわれた1678年前後の状況について論じる前に、まずはシモンとボシュエについてそれぞれの伝記的背景を見ておきたいと思う。両者がいかなる家系に生れ、どのような形で知的形成を行ない、聖職者としてまた学者として如何なるキャリアを歩んできたかを知ることは、本研究のテーマについて考察する上で大いに参考となると思われるからである。

1）リシャール・シモン[29]

リシャール・シモンは1638年5月17日、ノルマンディーの小都市ディエップDieppe[30]においてジョアシャン・シモンJoachim Simonとマルグリット・ルナールMarguerite Renardを両親として生を受けた。「リシャール」の名は彼の名付け親となった同姓同名の弁護士リシャール・シモンによるものであった。シモン家は刃物製造もしくは鍛冶一般を生業とする慎ましい職人の家系であり、このことが、後にリシャール・シモンのキャリア形成において少なからぬ影を落とすことになる[31]。

リシャール・シモンの学業はディエップのオラトリオ会の学校への入学に始まる[32]。彼自身はこの学校についての思い出をほとんど記していないが、ギリシア語を学んだことだけは確からしい。哲学級の第一年目を終えた後、シモンは1657年からルーアンのイエズス会の学校に移り、哲学、倫理学、論理学を学ぶ。この年から翌年にかけてパスカルの『プロヴァンシアル』が発表され、ルーアンにおいてもイエズス会の学校の校長であった反ジャンセニストの急先鋒ジャン・ド・ブリザシエ神父をはじめとして、カトリックの学

者や僧侶や学生たちの間で激しい神学的論争が行なわれるのを目の当たりにしたことが、（後にジャンセニスト達との困難な関係を経験することになる）シモンの知的形成においてそれなりの影響を与えたと思われる[33]。イエズス会の学校での一年間の勉学の後、シモンはパリのオラトリオ会の修練院に入ることになる。これは、ディエップのアドリアン・フルニエ神父が彼のために奨学金を手配してくれたことによる。シモンは1658年10月22日に入学を認められたが、それから一年もたたないうちに修練院を去っている。シモン自身はこの時期についてほとんど記録を残していないが、シモンに関する一連の優れた研究を行なったポール･オヴレーは､家柄が良く私費で学業を行なっていた修練生たちの中にあって、シモンは唯一職人の家系の出であり奨学金の給付を受けていたために、社会階層の違いによる差別に苦しんだのではないかと想像している[34]。こうしてパリを去って一旦ディエップに戻ったシモンだったが、ド・ラ・ロック師という人物が彼に救いの手を差し伸べ[35]、その財政的支援を得てパリに戻り、勉学を続けることになる。1659年から1662年まで、シモンは神学や聖書学、ヘブライ語やシリア語などの東洋語を学び、その後の彼の研究の土台をなす膨大な読書が始められる[36]。彼が特に関心を持ったのは神学ではなく、歴史、古代語、そして聖書に関する学問であった。1662年、シモンは再びオラトリオ会の修練院に戻ることを希望し、9月13日に受け入れられる。しかしそこでの生活はやはりシモンにとって心地よいものではなく、聖職者としての務めと彼の望む聖書に関する学業を両立させることが困難な状況が生じ、イエズス会に移ることを考えたこともあった。しかしオラトリオ会の上司にシモンのこうした情熱と傾向を理解する者もおり、なんとかシモンはオラトリオ会での修練期を終えることができた。その後はシモンにとって比較的安定した時期が訪れる。1663年から1668年にかけて、ジュイリー Juillyの学校の教師として若者に哲学を教える一方、パリのサン＝トノレ通りのオラトリオ会の館に住み、貴重な写本を多く所有するその図書館の蔵書整理や目録作りを担当、またパリの他の様々な図書館を頻繁に訪れて研究を続けると共に、オラトリオ会の優れた神父たちと出会う機会を持った。その中にはフランスの哲学界において名を馳せることになるニコラ・マルブランシュもいた。また、パリに滞在していた博学なユダヤ人ジョ

ナ・サルヴァドールJona Salvadorと知り合い、毎週土曜日にオラトリオ会の図書館で一緒にユダヤ教関連の文献を読み続けたことは、シモンが後の旧約聖書研究においてユダヤ人の著作を活用する上での重要な基礎となった。彼が一貫してユダヤ人に対して好意的な態度を示していたことについては、このユダヤ人との個人的な友情関係があったことが大きく影響していると思われる[37]。また、聖書の記述の分析をもとにアダム以前の人間の存在を主張する論考を発表し物議を醸していたイザーク・ド・ラ・ペレールIsaac de La Peyrèreとも知り合い、彼との会話を通して、後の旧約聖書研究につながる様々なアイデアを蓄えていった。その後1669年には副助祭、1670年に助祭となり、1670年9月20日には司祭に叙階された。ただし学者シモンに課された公的な仕事はわずかなものであり、なるほど静かに研究を行なうには理想的な環境であったが、一方で金銭面では慢性的な欠乏状態に置かれてかなり苦労したようであり、その状況は晩年に至っても変わることはなかった。

リシャール・シモンの最初の学術的な成果としては、カトリック正統派の教義に関わる「聖体におけるキリストの現存」の問題について、正教会の総大主教であり神学者であったフィラデルフィアのガブリエルの著作の抜粋を行ない、それに自身の膨大な注を付した『東方教会の信仰』（1671年）[38]、ヴェネチアのラビであったレオン・デ・モデナの『ユダヤ人の儀式と習俗』の翻訳と注解（1674年）[39]、そしてイエズス会士ジローラモ・ダンディーニの東方旅行記を再編集し、注を付けて出版したもの（1675年）[40]などがある。これらの著作によって既に学者として内外で一目置かれる存在になっていたシモンに対して、1676年から77年にかけて、シャラントンCharentonの新教徒の企画による聖書の新しいフランス語訳への参加の機会がめぐってきたが、新教徒側の内部対立の影響や、翻訳の方法論をめぐる対立および資金的な問題をめぐる対立により、この企画からは手を引くことになった。しかし、その際に準備された聖書の翻訳方法をめぐる考察は、シモンの『旧約聖書の批判的歴史』第3巻第1章において活用されることになる。彼は既に1665年ごろからこの『旧約聖書の批判的歴史』を準備しており、10年後の1675年前後にはほぼ執筆を完了していたらしい。ただ、完成が近づいていた時期に、その後の西欧の聖書研究を大きく揺さぶることになるスピノザの『神学･政治論』

に出会い[41]、幾つかの部分の議論の補強を行なうとともにスピノザに対する反論も序文に組み込み、出版に向けての手続きを着々と進めていた。

2）ボシュエ[42]

ボシュエも若くして僧籍に入った人物であり、生来の才能に加えて人一倍の努力家･勉強家であって、若くしてその学識は他を圧倒するものであった。しかしそのキャリアはリシャール・シモンとは対照的であった。本稿ではボシュエの「輝かしい」生涯の中でも『旧約聖書の批判的歴史』の出版前後、つまり1780年前後までのボシュエの歩みについて見ておきたい。

ジャック＝ベニーニュ・ボシュエは1627年9月27日にディジョンの地方司法官ベニーニュ・ボシュエを父として生まれた。ボシュエ家は古くはスールSeurreという小都市で車大工を営んでいたが、15世紀後半に地方名士の仲間入りをし、ディジョンに移り住んだ後は着実に社会的地位を上げ、16世紀にはブルゴーニュの高等法院に入り、地方司法官の地位を確固たるものにしていった家系であり、伝統的なカトリック教会そして国王に対する厳格な忠誠を示す家系であった。とはいえ、後の彼の華やかなキャリアをあらかじめ約束してくれるような高貴な家柄というわけでもなかった。

ジャック＝ベニーニュは、幼くして僧籍に入る。1635年12月6日に剃髪、さらにボシュエ家がその人脈を駆使し、1640年11月20日、14歳にもならないうちにメスMetzの司教座聖堂の参事会員に任命される。当時彼はディジョンのイエズス会の学校で勉強中であり、まだ2年間の学業を残す身であった。1642年10月に彼はパリのナヴァール学寮へと移り、そこで2年間哲学の勉強をする。またこの時期にパリ社交界の名士の集うランブイエ館での会合において、その若き弁士としての才能を初めて披露することになる。1644年8月文学士となり、引き続いて神学を学ぶ。このパリ時代においてボシュエは、極めて敬虔な人々のグループ、そしてパリの上流貴族社会との交わりを経験することで、聖俗両界の人脈を広げただけなく、博学な学問研究の世界に触れ、その後の彼の人生の大きな闘いのテーマとなる聖書の歴史的批判研究の魅力とその危険についても知見を得たとされる。

ボシュエはメスの聖堂参事会員としての仕事とパリでの学業の間を行き来

しながら、聖職者および学者としての実力を着々と蓄えていく。1648年には副助祭、1649年には助祭と地位を上げ、1652年3月16日に司祭に叙階され、同年5月16日にはソルボンヌで博士号を獲得する。司祭という聖職について、常にそれに相応しい威厳、そして人々を導く者としての厳しい自覚を求めたボシュエは、1652年から1659年の間メスに住んで自らの務めを忠実に果たした。当時メスには多くの新教徒そしてユダヤ人が住んでおり、この地においてボシュエは説教を行ない、改宗勧誘を熱心に行なった。1659年、32歳にして新たにパリに赴任するが、その後の十年間にボシュエは説教家としての名声を高め、その輝かしいキャリアの本格的なスタートを切ることになる。彼は王に招かれて御前説教を行ない、また王侯貴族の追悼演説なども行なうようになる。ボシュエの一連の雄弁作品の傑作中の傑作とされているルーブル宮での『四旬節説教集』（1662年）、『英国王妃アンリエット＝マリー・ド・フランス追悼演説』（1669年）、そして『オルレアン公爵夫人アンリエット＝アンヌ・ダングレテール追悼演説』（1670年）などがこの時期に生み出されている。ルイ14世は、マザラン枢機卿が1661年に没した後に親政を開始し、フランスの中央集権化を一層推し進め、新たに強力な政治・宗教体制を確立していく過程にあったが、ボシュエのその後の人生はこの才能ある君主の動向に密接に結びついていくことになる。1670年、ルイ14世はボシュエを王太子ルイの個人教師として選ぶ。当時ボシュエはコンドームCondomの司教に任命されたばかりであったが、この司教職を辞して、王太子の師としての任務に没頭する。彼の教育プランは、将来君主となるべき人間の訓育であることを常に念頭に置いたものであり、数学を除く一切の教授科目を彼自身が引き受けた。この仕事はボシュエがその広大な学識を再検討し、さらに深めることに役に立ったが、一方で王太子の怠惰と知的貧しさはボシュエの努力を水泡に帰さしめたとされる[43]。王太子の教育が終わると、1681年、ボシュエはモー Meauxの司教に任命された。そして同年末に召集されたフランス聖職者会議の主宰者となり、フランス教会を指導する立場に就いた。リシャール・シモンの問題作は、ボシュエがまさにフランスの政治・宗教界において極めて大きな影響力を持つ地位に登りつめようとしていた時期に現れたのである。

3.『旧約聖書の批判的歴史』の発禁処分をめぐって

1）発禁処分に至るまでの経過

ここからはリシャール・シモンとボシュエの最初の対立を生じさせた1678年の『旧約聖書の批判的歴史』発禁処分に至る一連の流れを具体的に見ていきたい。実はこの事件の具体的な展開については、シモン自身、ボシュエ自身、さらにはこの件に関わった様々な人物達の間で異なる証言と異なる解釈が存在する[44]のだが、現時点において最も信頼のおけるポール・オヴレーの研究に従えば、基本的な線は次のようなものである[45]。

シモンは、『旧約聖書の批判的歴史』の序文でも書いている通り、この書物が読者にとって信仰を揺るがす危険な情報ではなくむしろ聖書をよりよく理解するための有益な情報をもたらすものであることを確信しており、実際に検閲を担当したソルボンヌ神学部の評議員ピロPirot、そしてオラトリオ会総会長はシモンに対して特に問題なく出版の許可を与えた。シモンはさらに、知り合いのイエズス会士ヴェルジュス神父を通じて国王ルイ14世に献呈の辞を届ける手筈を整え、王から受け取りの返事が届き次第、印刷と製本を最終的に完成させ、自身のこの渾身の作品を本屋の店頭に並ばせることになっていた。

こうして『旧約聖書の批判的歴史』はほぼ印刷が終わり、1300部がビレーヌ書店もしくは製本業者のもとでタイトル・ページと王への献呈の辞、正誤表を含む最後の折り丁の到着を待つばかりとなっていた。ところが1678年4月7日聖木曜日、ボシュエの聖書読書サークル「小さな公会議(Petit Concile)」のメンバーの一人であるニコラ・トワナールNicolas Toinardが、どのようなルートを通してかは不明だが、「たまたま」シモンの公刊直前の書物の目次ページを手に入れ、ボシュエに渡した。その目次を見たボシュエは、すぐさま大法官ミシェル・ル・テリエMichel Le Tellierのもとに向かい、この書物の差し押さえを要求した。4月9日には警視総監ラ・レニー La Reynieが動き出し、警視ドラマールDelamareに差し押さえを命令する。4月30日、600部が押収され、5月28日にはさらに700部が押収、6月19日には国王閣議決定によりシモンのこの著作は禁書とされた[46]。7月17日に全部を焚書とする命令が出され、

7月18、20、22日にかけて執行された。焚書を逃れたのはごく限られた部数で、1680年にアムステルダムで第二版が出るまで、ごくわずかの人々の目にしか触れることはなかった[47]。

禁書処分を受けて、シモンは弁明に乗り出した。禁書処分を解いてもらうために*Mémoire instructif*『有益な覚書』を執筆したり[48]、ボシュエとの直接の対談に臨んだり[49]、オラトリオ会総会長であったデ・サント＝マルト神父に手紙を送ったりしたが、功を奏しなかった。検閲官であったピロは、検閲の際にシモンにいくつもの修正を求めたのに、それをシモンが行なわなかっただけではなく、幾つかの加筆を行ない、検閲にかけずに印刷にまわしたことを非難する始末であった。シモン自身は5月21日にオラトリオ会から突然の除名通告を受けた[50]。彼は、その決定に逆らうことなく、またパリ司教やランス聖堂参事会の執り成しも辞退し、きっぱりとパリを去り、ボルヴィルBollevilleの小修道院に引きこもった。

シモンは、この一連の事件の黒幕が、1669年にアウグスティヌスに関する否定的議論を展開して以来関係をこじらせてしまっていたポール＝ロワイヤルのジャンセニストたちによるものであると考えていたが[51]、当時の錯綜する証言や資料を綿密に検討したポール・オヴレーおよびその他の研究者たちは、この件についてはボシュエが第一の責任者であった事実は動かしようがない、と結論づけている[52]。

2）発禁を求めたボシュエの論点

先ほど見たように、この時期ボシュエはフランス王国内の宗教問題の処理に関して最も影響力を持つ人物であり、国王をはじめ政界の有力者たち、治安関係の役人たちとの関係も密接であった。そうしたボシュエがシモンの研究の方向の危険性についてあらかじめ知らされており、その著作を禁書にするシナリオはしばらく前から準備されていたものであって、目次を見たというのは単に口実にすぎないとする見方も可能である[53]。ただ、当時の証言のほとんどは、ボシュエがただ目次に目を通しただけで、大法官のもとへ差し押さえを求めて駆け込んだとしている。そもそもボシュエの手に渡った目次とはどの様なものであり、どのような形で渡ったのだろうか。ボシュエは晩

年の手紙の中でこの事件を回想し、当時本の目次だけでなく序文も自分の元に届けられたと記している[54]。ただ、仮にボシュエがシモンの研究の動向についてあらかじめ何らかの情報を得ていたとしても、この大著をあらかじめ手に入れその内容を入念に検討していたわけでなかったろう。よって『旧約聖書の批判的歴史』という書物の全体をめぐって展開された1680年代以降の議論については次稿に譲り、本稿ではボシュエの手元に渡った目次というのが、彼が出版の差し止めを求めた1678年版に含まれる目次とまったく同じものであったと考えて議論を進めることにしたい。

1678年版、そしてそれに続く諸版にもほぼそのまま引き継がれていくこの目次は、この著作の各章の内容を要約した詳細な目次となっており[55]、それに目を通すことによって、ボシュエならずともこの書物の方法論、そして研究の方向性が極めて明快に見てとれるようになっている。この書物は3巻に分かれ、第1巻は「モーセから現代に至るまでの聖書ヘブライ語テクストについて」と題され、旧約聖書のヘブライ語本文テクストの文献学的かつ歴史批判的な検討が行なわれることが予告される。聖書の各文書、とりわけ「モーセ五書」の現行テクストについて、執筆された時点から今に至るまでの長い時の経過の中で様々な改変や編集が行なわれた結果として、理解の困難な箇所がいくつも生じていることが示される。続く第2巻は「聖書の主要な諸翻訳について」と題され、第1巻で見たような改変や編集を経て意味が不明瞭になったテクストをより良く理解するための参考として、古代から現代に至る主要な聖書翻訳を検討するものである。七十人訳と呼ばれるギリシア語訳、ウルガタと呼ばれるラテン語訳を中心に、シリア語、アラビア語、コプト語、アルメニア語などの東方諸語による訳、そしてより近年のヨーロッパ各国語による訳や新教徒による訳も検討され、それぞれの長所や問題点が指摘される。そして最後の第3巻は「聖書のよい翻訳の仕方について、また聖書にいかに不明瞭な箇所があるかについて。加えて聖書について論じたキリスト教徒およびユダヤ教徒の最良の著作家たちについての批判的検討」と題され、今後の新しい聖書の翻訳のための方法論が開示されるとともに、古代以来の権威ある主要な聖書注釈の批判的検討がなされる。

このように、目次をざっと見ただけでも、現行の旧約聖書ヘブライ語本文

のテクストとしての不完全性が指摘され、また教会の権威と教義の絶対的な源である七十人訳聖書およびウルガタ聖書の翻訳としての質がある意味相対化され、続いてより新しくより正確な翻訳を作る提案がなされ、同時に古代以来の様々な聖書注解も批判的検討に付されるという流れが明快に理解できるようになっていた。要するにその目次は、聖書の権威そしてカトリック正統派教会の権威の力学に極めて敏感なボシュエにとって、出版差し止めに向けた迅速な行動をとらせるのに十分な材料を含んでいたといえる。

この時点でボシュエにとって問題となっていたのは、まずは神学的歴史観に関わる問題である。ボシュエはこの時期、王太子のために、先にも触れた『世界史論』の執筆にかかっていた[56]。聖書の真実性、伝承によっても確証されたその真正性こそが彼の歴史観における絶対の基盤であり、もしそれが疑問に付されれば、彼の神学的歴史観さらには彼自身の威厳、そして彼が事実上代表しているフランス王国の正統派カトリック世界の威厳が貶められることになり、それを避けるためにはシモンの著作に対して正面から反論を行なうことがどうしても必要であると考えたボシュエは、『世界史論』や『伝承および聖教父たちの擁護』のように最晩年まで書き続けられた著作の中で、頻繁にシモンの名を挙げて批判を展開していく。

ボシュエは、『世界史論』の第1部の冒頭において、モーセを「歴史家の中で最も古く、哲学者の中で最も崇高で、立法者の中で最も知恵のある者」であるとし、その彼がまさにその「歴史」書であるモーセ五書を天と地の創造から始めたことの重要性を説き、自身の『世界史論』もそれにならって神による天と地、そして人間の創造から始めるべきであることを強調する。ボシュエは第1部において天地創造からシャルルマーニュの戴冠に至るまでの時代を扱うが、その中でもモーセからイエス・キリストに至るまでの時代を「書き記された律法の時代 le temps de la loi écrite」とし、次のように述べる。

> モーセが書き記し、そしてそこにすべての律法が含まれているところの歴史物語もまた5つの巻に分けられて「モーセ五書 Pentateuque」と呼ばれ、〔我らの〕宗教の基盤をなしている[57]。

また、第2部第3章においては、なぜそれが「書き記され」ねばならなかったかについて述べられる。

> 真理というものが、人々の記憶において不十分にしか保たれず、書き記されることによってしか保持されないような時代がやってきていた:そして神はさらに、より厳しく定められた、より多くの律法によって自らの民の徳性を高めようと決心し、同時にそれらの律法を書き記された形で与えることにした。
>
> そしてモーセがこの仕事へと指名されたのである。この偉大な人物が過去の世紀の物語を集めたのだ〔……〕[58]。

しかし、こうして書き記された神の律法を含むテクストが、リシャール・シモンの指摘する如く、人間の手による伝承の過程で仮に崩れていくようなことがあれば、その「真理」そのものの真理性が危うくなるとボシュエは考え、神のものである聖書については、とりわけ「モーセ五書」のテクストについては、人間の手による改変という考え方を決して導入すべきではないとする[59]。

次にボシュエにとって深刻に思われた問題は、この著作がフランス語で書かれたことであった。つまり、この本が聖書文献学の専門的な議論を理解できる限られた数の知識人向けに（学問の言葉である）ラテン語によって書かれているのとは違い、より広い読者に読んでもらうことを前提に書かれていることであった。

> しかし、彼〔リシャール・シモン〕が言うところでは、彼自身はその著書から何らか有益なものを引き出すことのできる知識人に向けてのみ書いたそうである。それならなぜ、われわれには知識人用の言葉〔ラテン語〕があるのに、彼はそれを使って語らないのか？なぜこれほど多くの不敬と冒涜を大衆および婦人達の手に委ね、好奇心に溢れさせ、論争的にし、解決が彼らの理解には到底及ばないような問題を矢継ぎ早に提起させるように仕向けるのか[60]。

さらに第3巻には新たなフランス語訳の企画に向けての翻訳方法論まで示されていた[61]。ボシュエは、新たなフランス語訳聖書の試みに向かって邁進するシモンの姿勢の中に、ラテン語のウルガタ聖書本文を基盤として様々な教義を積み上げてきたカトリック教会の土台を揺るがしうるものを見てとった。

また、シモンが旧約聖書の現行のヘブライ語本文に見られる改変や誤りを指摘してテクストの不完全性を証明することでいかに新教徒やソッツィーニ派の聖書第一主義を批判したとしても、同じ方法論が同時にウルガタ聖書テクストの権威の失墜をもたらしかねず、結果的にカトリックの基盤をも危うくするものでもあることがボシュエにとっては明白であった[62]。またシモンが、聖書を現行の本文テクストのみですべて理解するのは不可能であり教会の伝承、特に古代教父たちの聖書注解の参照が不可欠であると述べる一方で、そうした教父の権威の頂点に立つアウグスティヌスをシモン自身が必ずしも高く評価はしないであろうこと、またそれはこの教父がギリシア語もヘブライ語もアラム語も十分読めなかったことと無関係でないだろうことをボシュエは見抜いていたであろう[63]。

ただ、1678年の時点でボシュエは、オラトリオ会総会長のド・サント＝マルト神父に宛てた書簡の中で「私は彼〔=シモン〕が、彼自身の教説から生じる重大な影響を十分理解していないことを恐れております」[64]と述べているように、シモンのそうした姿勢を宗教政治的な力学に無知な若い学者の無邪気さによるものと考え、発禁という厳しい処置を取った後でも、シモンと数回にわたって会談し[65]、『旧約聖書の批判的歴史』の問題箇所の書き換えを勧め、再出版の可能性を示唆することもした[66]。しかし今後見ていくように、その後もシモンはボシュエの危惧をよそに次々と「批判的」聖書研究の著作を世に出していき、それと共に二人の本当の戦いが始まるのである。

終わりに

リシャール・シモンとジャック＝ベニーニュ・ボシュエはそれぞれ若くしてカトリックの僧籍に入り、それぞれの環境の中において才能を開花させた。二人とも恐るべき勉強家であり、常に書物と向き合い、自らが重要だと考え

た問題については決して自らの意に反して譲ることをしなかった。しかし二人の歩んだ道は対照的であった。シモンがオラトリオ会の図書館で膨大な書籍や写本に囲まれて聖書本文の緻密な検証を行なう学者としての生活を送る一方で、ボシュエは教区の世話、フランス教会の指導、王太子の教育、異端との闘い、説教、宮廷への伺候など公人としての生活に追われながらも、常に書物と向き合う時間を大切にし、様々な相手に対してそれぞれに相応しい文章を書き連ねていった。

多忙な中でボシュエはシモンの『旧約聖書の批判的歴史』の本文を丁寧に検証する間もないまま発禁の処分へと動いたが、その嗅覚はある意味極めて鋭いものであったといえよう。今後見ていくように、ボシュエはこのシモンの著作について腰を据えて検討した後で、やはりそこには自分の立場からは受け入れられない内容があまりにも多く含まれており一般の信徒に向けてフランス語で書かれるにはあまりにも危険が多い書物である、という判断を強めることになるし、晩年に至るまで、さまざまな形で繰り返しこの書物に対する批判を展開していくのである。

ボシュエもシモンも聖書のテクストに対して深い関心と愛着を持っていた。シモンにとって聖書の批判的な検討は、本人が何度も繰り返し述べているように、聖書そのものについての信頼を揺るがすものではなく、ましてや信仰を揺るがすものではなかった。しかし、ボシュエにとってはまさにそうした細かな分析によって、自らの生、信仰そして文体の基盤であるテクストが解体されていくことに対する、ほとんど生理的な恐怖のようなものがあるように思われる。彼が幼いころから人一倍読み、自らの生と文体の糧としてきたテクストについて歴史批評的精神がもたらす危険についてボシュエは同時代の誰よりも敏感であったと思われる。『旧約聖書の批判的歴史』をめぐる騒動の後も、シモン本人およびその周辺の人々との議論を通じてボシュエのこうした危機意識はより堅固なものとなっていく。一方シモンは、この失敗に落胆してしまうことなく、新約聖書という新たなターゲットに向かって研究を進めることになるが、それについては次稿で扱うこととしたい。

附録　リシャール・シモン『旧約聖書の批判的歴史』の目次（1678年版[67]より）

第１巻　モーセから現代に至るまでの聖書ヘブライ語テクストについて

第１章　この書物全体の意図について、およびこの同じ主題に関する複数の解説。

第２章　聖書の作者は誰か、ヘブライ人たちにおいて預言者の役割は何であったかについて。預言者たちがこの聖書の諸文書に自由に加筆、削除を行なったことについて。

第３章　聖書テクストのいくつかの変化の起源について。同じ出来事が、異なる文書において、しかもいくらか異なった形で繰り返して語られていることの理由について。

第４章　聖書諸文書においてもたらされた諸変化のより個別的な説明、とりわけ捕囚後における変化の説明。この件についてのラビの、そして教父たちの意見。聖書がいかにしてまとめられたか。

第５章　聖書、とりわけ「モーセ五書」について加筆やその他の変更がなされた証拠。モーセは彼に帰せられる文書全体の作者ではありえないこと。いくつかの実例。

第６章　モーセが「律法の書」の唯一の作者だとするユダヤ教徒側からの反論。そうした意見を反駁するための新しい証拠による回答。

第７章　「律法の書」がいかに書かれたか。モーセ以前に生きた族長たちに帰せられる文書群について。サバイ人、もしくは古代カルデア人たちの歴史。

第８章　ユダヤ教徒たちが、エズラの時代に開催された大集会において集成されたと主張する聖書の他の文書群について。この大集会についての検討および聖書の各文書の検討。

第９章　聖書の一般的な分け方について。この件についてのユダヤ教徒著作家とキリスト教徒著作家の意見の一致。ユダヤ教徒たちがダニエルを預言者として認めないのはどういう意味においてであるか。これについてキリスト教徒著作家たちも同じ意見であること。

第10章　ユダヤ教徒たちの律法は一度も損なわれたことはないと主張する

ジョゼフ・アルボの根拠について。「サマリア五書」の検討。そこからわれわれは今日も「モーセ五書」の古代の版を持っていると証明できるか。

第11章　サマリア五書ヘブライ語テクストの個別検討。このテクストをユダヤ教徒たちのヘブライ語テクストより重視すべきか。様々な読みの実例および考察。

第12章　サマリア五書ヘブライ語テクストについての考察。

第13章　サマリア文字について。その起源。フェニキア文字について。ギリシア教父がサマリア版について論じている箇所についての説明。文字タウについて。

第14章　ヘブライ語について。ヘブライ語が世界で最初の言語であるかについて。諸言語がいかに創られたかについて。この主題についての様々な意見の間の一致。

第15章　とりわけ諸言語がいかにして創られたかの説明。言語の起源に関する余談。

第16章　捕囚からの帰還以降、我らの救い主イエス・キリストに至るまでの時期のヘブライ語テクストの状態について。サドカイ派について。サドカイ派の者たちが聖書全体を受け取ったこと。七十人訳で使われたヘブライ語諸テクストについて。

第17章　我らの救い主イエス・キリストの時代、初期キリスト教の時代のヘブライ語テクストの状態について。フィロンとヨセフスについて。ヨセフスの言っていることはほとんど間違いであること。キリスト教がユダヤ教徒たちを正したこと。ユダヤ教徒たちの改革。

第18章　ユダヤ教徒たちによるヘブライ語テクストの改竄に関するモラン神父とフォッシウス氏の説明体系。この件に関する教父たちの意見の説明。

第19章　ヘブライ語テクストと七十人訳に関するオリゲネスと聖ヒエロニュムスの意見。この二人の著作家の書き方。ユダヤ教徒たちは聖典を改竄していないこと。様々な考察。

第20章　キリスト教の初めの数世紀におけるヘブライ語テクストの状態。タルムードにおける聖書の様々な異読。

第21章　ヘブライ語テクストの諸写本。シナゴーグで使われる諸写本と個人

用に使われている諸写本の間の相違。どの聖書写本が最良であるか。

第22章　聖書の良い写本と悪い写本を区別するための規則。とりわけいくつかの写本に関する議論。

第23章　聖書テクストの写本に関する個別的考察。写本の様々な書き方による様々な異読の起源。

第24章　マソラについて。この件に関するユダヤ教徒たちとキリスト教徒たちの様々に異なる意見。そのなかで信じるべき事柄。

第25章　マソラについてのより個別的な説明。マソラが含む有用な規則について、そこから聖書の古代の諸翻訳の正しさを確認できることについて。

第26章　マソラを構成する諸部分についての説明。この件に関する批判的考察。

第27章　現行の聖書のヘブライ語テクストに見られる母音点とアクセント記号について。母音点がいつ発明されたか、なぜカライ派が母音点を受け入れているか。母音点とアクセント記号の権威。その起源。そのなかで信じるべき事柄。

第28章　今日ヘブライ語テクストで使われている節区分について。ヘブライ語テクストのその他の区分方法について、加えてこの件に関する複数の説明。

第29章　カライ派と呼ばれるユダヤ教の宗派について。カライ派は他のユダヤ教徒たちと同じように聖書の24文書と母音点、アクセント記号を受け入れていること。この宗派に関する様々な解説。

第30章　ユダヤ教徒たちにおける文法学の起源。いつそれが始まったか。その発展。最も有名なユダヤ教徒文法学者たちの目録。

第31章　ユダヤ教徒文法学者たちの歴史と彼らの書物に関する論議、そこからヘブライ語文法の起源、発展、また同時にその不確かさを知ることができること。

第２巻　聖書の主要な諸翻訳について

第１章　ユダヤ教徒およびキリスト教徒によってなされた聖書の諸翻訳についての概観。

第2章　七十人の訳者に帰せられているギリシア語訳について。その権威について。アリステウスの歴史およびいくつかの古い書物がこの件について推定されているようであること。最初にギリシア語に翻訳されたのはモーセの律法だけである。なぜこのギリシア語訳が七十人訳と呼ばれたか。

第3章　七十人訳ギリシア語聖書の異なる諸版について。オリゲネスの四版校合、六版校合、八版校合およびこの件に関する批判的考察。七十人訳とヘブライ語テクストの比較。七十人訳の異なる諸版の比較。

第4章　七十人訳に向けられた様々な意見についての論議。フォシウス氏の意見が検討され、氏が主張するのとは異なり、ユダヤ教徒たちがヘブライ語テクストを全く改竄してはいないことが示される。聖書の年代学に関する様々な考察がなされ、七十人訳がヘブライ語テクストよりも優れているわけではないことが示される。

第5章　七十人訳ギリシア語聖書への評価。とりわけ七十人訳がヘブライ語テクストを今日とは異なる形で訳している箇所の検討。

第6章　創世記第49章の七十人訳ギリシア語聖書の検討、およびこの翻訳と現在のヘブライ語テクストからなされた新しい諸翻訳との比較。

第7章　詩篇第22編の七十人訳ギリシア語聖書の検討、およびこの翻訳と現在のヘブライ語テクストおよび聖ヒエロニュムスの翻訳との比較。その結果として、上の数章と同様、聖書のヘブライ語テクストがいかに不明確であるかが判断できるであろう。

第8章　七十人訳の正しさを確かめるために役立つ様々な規則について。

第9章　現在断片しか伝わっていない聖書のギリシア語訳の他の版について、とりわけサマリア人が使用した版について。

第10章　以上で示されたものとは別のギリシア語訳聖書が存在したか、七十人訳の名をもつ他の異なった翻訳が存在したかについて。オリゲネス、パンフィロス、エウセビオス、ルキアノス、ヘシュキウス、アポリナリスらが聖書の新しい翻訳を行なったかについて。オリゲネスの八版校合についてのいくつかの新しい考察。

第11章　西方教会で使用された聖書の古い諸翻訳について、とりわけ今日のウルガタ訳について。誰がその作者であるかについて。

第12章　ウルガタ訳の数章を、聖ヒエロニュムスが『創世記に関するヘブライ語テクストの問題』の中で行なった指摘と照合しつつ、検討する。

第13章　ウルガタ訳の中で聖ヒエロニュムスによる翻訳であることが明らかな諸文書と七十人訳の比較。このウルガタ訳の複数の箇所の正しさを確認するための諸規則、および幾らかの考察。

第14章　古ラテン語訳の権威がトリエント公会議において宣言され、しかもそれが権威ある唯一の訳とされたのはいかなる意味においてであるか。この件についての複数の批判的考察。

第15章　他の諸教会で使用された聖書の諸翻訳について、とりわけシリア語の諸翻訳について。印刷出版されたシリア語訳の批判的考察。この件に関する様々な考察、およびシリア語についての様々な考察。

第16章　聖書のアラビア語の諸翻訳について。それらがいつの時代に、どのような機会になされたのかについて。コプト教徒、エジプト人、アルメニア人、その他の多くの民の使用のために作られた諸翻訳について、またこれらの様々な国々の言語に関する考察も含む。

第17章　ユダヤ教徒たちによる聖書の翻訳または翻案について。ヘレニズム化したとよばれるユダヤ教徒たちがシナゴーグにおいて七十人訳ギリシア語しか読んでいなかったのかについて。これらのヘレニズム化したユダヤ教徒とはどういう人々か、彼らが自分たちの使用のために、その後七十人訳とされることになる〔ギリシア語への〕翻訳をいかに行なったかについて、サマリア訳について、またその翻訳のラテン語訳について。

第18章　カルデア語翻案について、これらの翻案の作者についても、それがなされた時期についても確かなことは何も言えないこと、これらの翻案の方法について、カルデア語について、これらの翻案の様々な文体について、カルデア語の句読点法にもたらされた諸改革について、またそれらを採用すべきかについて、数多くの箇所においてユダヤ教徒たちの迷信に手を貸すようなこれらの翻案を印刷すべきかについて。

第19章　ユダヤ教徒によってなされた様々な言語への聖書の翻訳もしくは翻案について、それらの諸言語の幾つかについての批判的考察、とりわけ俗ギリシア語について。

第20章　キリスト教徒によってなされた聖書の新しい諸翻訳について、とりわけカトリックの作者によってなされたものについて。

第21章　プロテスタントによってなされた聖書ラテン語訳について。

第22章　俗語でなされた聖書の新しい諸翻訳について、とりわけカトリックによってなされた諸翻訳について。

第23章　ローマ教会から分離した人々によって俗語でなされた聖書の翻訳について、とりわけルターの翻訳について。

第24章　プロテスタントによってフランス語でなされた諸翻訳について。

第25章　プロテスタントによってなされたその他の聖書フランス語諸訳について。

第３巻　聖書のよい翻訳の仕方について、また聖書にいかに不明瞭な箇所があるかについて。加えて、聖書について論じたキリスト教徒およびユダヤ教徒の最良の著作家たちについての批判的検討

第１章　聖書の新しい翻訳の計画、同時に他の諸翻訳の欠点が示される。

第２章　上の聖書の新しい翻訳の計画の続き。

第３章　聖書の新しい翻訳を行なうにあたって出会う様々な困難の新たな証拠群。

第４章　聖書の新しい翻訳を行なうにあたって出会う他の困難の他の実例群。

第５章　聖書解釈の主要な著作家たちの、とりわけユダヤ教徒著作家たちの評価。彼らの間での様々な聖書解釈の方法。

第６章　ラビ・モーセによる聖書の正しい解釈のための規則の検討。この件に関する他のラビたちの方法。

第７章　ラビたちの読み方を認めるべきかについて。彼らの著作において使用されている言語について。

第８章　初期教父たちの聖書釈義の方法。聖アウグスティヌスの聖書解釈の規則の検討。

第９章　主要な教父たち、とりわけオリゲネス、聖ヒエロニュムス、聖アウ

グスティヌスの聖書注解に見られる方法の検討。

第10章　他の複数の教父たちの聖書注解に見られる方法の検討。様々な時代における様々な解釈方法。

第11章　カトリックの著作家によるいくつかの著名な書物の批判的検討。

第12章　聖書に関する注釈または注記を執筆した何人かの著作家たちそれぞれに対する評価。同時に聖書釈義において守らなければならない方法とはどのようなものかが示される。

第13章　プロテスタントたちが彼らの聖書釈義において従った方法について、とりわけマティアス・フラキウス・イリュリクスが『聖書の鍵』と題した本の中で述べている諸規則についての論議。

第14章　聖書に関する注釈または注記を執筆した主要なプロテスタント著作家の批判的検討。

第15章　イギリスのプロテスタントたちによって書かれた、聖書に関する二つの重要な選集の批判的検討。

第16章　ソッツィーニ派について。彼らの聖書解釈法。その方法に関する様々な考察。

第17章　聖書の理解のために有用ないくつかの書物、とくにカトリックの著作家たちによって書かれたものの批判的考察。

第18章　聖書に関する批判的研究を書いたカトリックの著作家たち、とりわけモラン神父についての評価。

第19章　聖書について書いたプロテスタント著作家たちについての評価。

第20章　聖書に関する批判的研究を書いた他のプロテスタントの著作家たち、とりわけルイ・カペルについての評価。

第21章　イギリス多言語聖書の冒頭におかれた諸序論、とりわけ言語についての最初の三つの論文の批判的考察。

第22章　イギリス多言語聖書の冒頭におかれた序論４、５、６、７の批判的考察。

第23章　イギリス多言語聖書の冒頭におかれた序論８、９の批判的考察。

第24章　イギリス多言語聖書の冒頭におかれた序論10、11、12、13、14の批判的考察。

聖書の主要な諸版の目録およびそれについての様々な考察

ヘブライ語聖書の写本および印刷本の諸版について
多言語聖書の諸版およびあらたな簡略版多言語聖書の計画
サマリア聖書、カルデア語聖書、シリア語聖書、アラビア語聖書そしてエチオピア語聖書
ギリシア語聖書
ラテン語聖書
俗語による聖書
『旧約聖書の批判的歴史』で言及されたユダヤ教徒著作家およびほとんど知られていない何人かの著作家についての目録。

目次おわり

注

1 リシャール・シモンをフランス文学史、思想史の立場から十分に論じた研究はフランス本国でも決して多くはないが、日本においては筆者の知る限りほぼ皆無である。日本語で読める文献としては、おそらくポール・アザールの『ヨーロッパ精神の危機 1680-1715』の翻訳（野沢協訳、法政大学出版局、1973年）の第2部第3章と第4章がほぼ唯一ではなかろうか。ただし訳者の野沢協氏による訳注は、原著の情報の誤りを正すだけでなく、本文では説明されない背景的な事実を解説し読者の理解に供するとともに、原著出版以降に現れた重要な研究も参照文献として追加しており、極めて優れたものであることを指摘しておきたい。また17世紀における自由思想・反宗教思想研究の観点から、リシャール・シモンの著作の発禁処分以降に地下に潜り、いわゆる「地下写本」の世界を賑わすことになる聖書解釈関連文書に触れている興味深い研究として赤木昭三『フランス近代の反宗教思想』（岩波書店、1993年）がある。一方、聖書研究史・聖書解釈史の立場から英語やドイツ語などで書かれた論文は少なくない。日本語によるものとしては、手島勲矢『ユダヤの聖書解釈　スピノザと歴史批判の展開』（岩波書店、2009年）においてリシャール・シモンがスピノサとの関連において頻繁に言及されている。

2 『旧約聖書の批判的歴史』は1680年にアムステルダムで第二版が出版され、その

後1685年にはロッテルダムで新版が、またその海賊版がアムステルダムで二回出ている。

3 *A Critical history of the Old Testament, written originally in French by father Simon, priest of the Congregation of the Oratory, and since translated into English by a person of quality*, London, Printed and are to be sold by Walter Davis, 1682.

4 *Historia critica Veteris Testamenti sive Historia textus hebraici à Mose ad nostra usque tempora, autore R. P. Richardo Simone, presbitero Congreg. oratoriae. E gallico in latinum versa a Natali Alberto de Versé...juxta exemplar impressum*, Parisiis, s.l. (Amsterdam, Elzevier), 1681.

5 ポール・アザール『ヨーロッパ精神の危機 1680-1715』（野沢協訳、法政大学出版局、1973年）、p. 248。

6 ボシュエについてはその堂々とした威厳のある姿を描く肖像画もあれば、諷刺的、戯画的な肖像画も残っており、我々はそれらの画像から彼のおおよその風貌を思い描くことができるが、リシャール・シモンの肖像画は存在せず、彼の伝記作家Bruzen de la Martinièreの手になる以下のような記述が、そのさえない風貌をかろうじて想像させるのみである。

> シモン氏は小柄で、あまり人好きのしない風貌をしていた。「自然が彼に推薦状を書いた」などという言い方があるが、こういう言い方はまず彼には当てはまらない。彼がしゃべっているところを見なければ、彼があれほどの才能にあふれた人物であることを想像するのは極めて難しかった。

(« Eloge historique de Richard Simon prêtre » , in *Lettres choisies de M. Simon, où l'on trouve un grand nombre de faits anecdotiques de littérature. Nouvelle édition, revue, corrigée, augmentée d'un volume, et de la vie de l'auteur par M. Bruzen de La Martinière*, Amsterdam, Pierre Mortier, 1730, p. 3-4)

7 ラ・レニー La Reynieとは、後にみるように、1678年にリシャール・シモンの『旧約聖書の批判的歴史』の出版差し止めを担当した警視総監である。

8 « Bossuet, assisté par La Reynie, tua les études bibliques en France pour plusieurs générations. » Ernest Renan, « L'exégèse biblique et l'esprit français », *Revue des deux mondes*, 35e années, 2e période, t. LX, 1865-6, p.241.

9 « Bossuet, en persécutant Richard Simon, avait cru délivrer l'Eglise de France d'un grand danger. Il préparait Voltaire. On n'avait pas voulu de la science sérieuse, libre et grave ; on eut la bouffonnerie, l'incrédulité railleuse et superficielle. Le succès de Voltaire vengea Richard Simon. », *ibid*., p.245.

10 [*L'Histoire critique du Vieux Testament par le R. P. Richard Simon, prêtre de la congrégation de l'Oratoire*], Paris, Billaine, 1678. ただしこの初版には、タイトル・

ページが欠けているため、この版を忠実に復元したとされる1685年版*Histoire critique du Vieux Testament, par le R. P. Richard Simon, prêtre de la congrégation de l'Oratoire, Nouvelle édition & qui est la première imprimée sur la copie de Paris, augmentée d'une apologie générale, de plusieurs remarques critiques, & d'une réponse par un théologien protestant*, Rotterdam, Chez Reinier Leers, 1685と同じタイトルを付けて示すのが一般的である。このロッテルダムの1685年版のテクストがもっとも良く、それに基づいたファクシミリ版も出版されている（Richard Simon, *Histoire critique du Vieux Testament*, Genève, Slatkine, 1971）。また2008年にはピエール・ジベールPierre Gibertによる詳細な注の付された新しいエディションが出版された（Richard Simon, *Histoire critique du Vieux Testament suivi de Lettre sur l'inspiration*, Nouvelle édition annotée et introduite par Pierre Gibert, Paris, Bayard, 2008）。

11 *L'Histoire critique du texte du Noveau Testament, où l'on établit la vérité des actes sur lesquels la Religion chrétienne est fondée, par Richard Simon, prêtre*, Rotterdam, chez Reinier Leers, 1689.

12 *L'Histoire critique des versions du Nouveau Testament où l'on fait connaître quel a été l'usage de la lecture des Livres sacrés dans les principales Eglises du monde, par Richard Simon, prêtre*, Rotterdam, Reinier Leers, 1690.

13 *L'Histoire critique des principaux commentateurs du Nouveau Testament, depuis le commencement du christianisme jusqu'à nôtre tems, avec une Dissertation critique sur les principaux actes manuscrits qui ont été cités dans les trois parties de cet ouvrage, par Richard Simon, prêtre*, Rotterdam, Reinier Leers, 1693.

14 *Défense de la Tradition et des Saints Pères* (1692-1693、未刊).

15 『我らが主イエスキリストの新約聖書、ラテン語の古い版に基づく翻訳であり、主要な難解箇所についての字義的かつ批判的考察を含む』*Le Nouveau Testament de nôtre Seigneur Jésus-Christ, traduit sur l'ancienne édition latine, avec des remarques litérales et critiques sur les principales difficultez*, A Trévoux, De l'Imprimerie de S.A.S. et par les soins d'Etienne Ganeau…1702, 4 vol.

16 この問題に関しては*Bible de tous les temps* (éd. C. Kannengiesser, Paris, Beauchesne) シリーズの第5巻 *Le temps des Réformes et la Bible* (éd. G.Bedouelle/ B. Roussel, 1989) 及び第6巻*Le Grand Siècle et la Bible* (éd. J.-R. Armogathe, 1989)のほか、*Hebrew Bible/Old Testament. The History of Its Interpretaiton. II From the Renaissance to the Enlightenment*, ed. Magne Sæbø, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2008, さらにはRené-Marie de La Broise, *Bossuet et la Bible*, Paris, Retaux-Bray, 1890 (Genève, Slatkine, 1971)が基本的な論点を提供してくれる。

17 Louis Cappel, *Critica sacra sive de variis quae in sacris Veteris Testamenti libris occurrunt lectionibus libri VI...*, Paris, S.Cramoisy et G. Cramoisy, 1650.

18 *Critici Sacri, sive Doctissimorum Virorum in SS. Biblia Annotationes et Tractatus*, ed. by

A. Scattergood, F. Gouldman, John et Richard Pearson, London, 9 vol. ,1660-1661.

19「われわれは申命記の最後の章の六章において、モーシェの墓について、「だれもこんにちにいたるまで彼の墓をしらない」、すなわちそれらのことばがかかれた日まで、というのをよむ。したがって、それらのことばが、かれの埋葬ののちにかかれたことは、明白である。なぜなら、モーシェが彼自身の墓について（予言によってではあっても）かれがまだいきていた日にいたるまで、それがみいだされないとかたったというのは、奇妙な解釈であるだろうからである[……]したがって、モーシェの五篇が、かれの時代のどのくらいのちにかかれたかは、それほどあきらかでないにしても、のちにかかれたということは十分にあきらかである。」（『リヴァイアサン（三）』水田洋訳、岩波文庫、1982年、p.38）。

20 この問題について考察する上で、先に触れたポール・アザールの著作のほか、注16に挙げた文献が重要な出発点となる。

21『世界史論』は初版が1681年、第二版が1682年、第三版が1700年に刊行されている。またオランダでは海賊版が少なくとも三種類表れたほか、イタリア語訳が二種類、ラテン語訳が一つ刊行されている。

22 とりわけ聖書と正統教義の基盤の関係を論じる第2部第29章に関してはボシュエによって様々な修正や加筆が行なわれており、注意深い検討に値するものである。

23 シモンは『旧約聖書の批判的歴史』の第1巻においてそうした例を多く挙げているが、例えば創世記第7章21節から23節がその典型的な例として挙げられている。

24 この問題に関してはJacques Le Brunの*La Spiritualité de Bossuet*, Paris, Klincksieck, 1972、Jean-Louis Quantinの *Le Catholicisme classique et les Pères de l'Église, Un retour aux sources (1669-1713)*, Paris, Institut d'Études augustiniennes, 1999および*Le Rigorisme chrétien*, Paris, Cerf, 2001のほか、Louis Cognet、Gérard Ferreyrolles、Auguste-Marie-Pierre Ingold、Aimé-Georges Martimort、Jean Orcibalらの研究が重要である。

25 この問題については、Thérèse Goyet, *L'Humanisme de Bossuet*, Paris, Klincksieck, 1965, 2 vol., Abbé J.-A. Quillacq, *La Langue et la syntaxe de Bossuet*, Tours, 1903 (Genève, Slatlkine, 1968), Marc Fumaroli, *L'Âge de l'éloquence*, Droz, 1980のほか、ボシュエの演説の文体に関するJacques Truchetの諸研究が重要である。

26 このいわゆる「トレヴー聖書」をめぐる文体と翻訳の問題は今後、本稿の最初に述べた第四期について扱う際に詳しく分析し、論じる予定である。

27 René-Marie de La Broise, *Bossuet et la Bible*, Paris, Retaux-Bray, 1890 (Genève, Slatkine, 1971), p.374.

28 サント＝ブーヴやフェルディナン・ブリュンティエール、ギュスタヴ・ランソンらによる、19世紀から20世紀初頭にかけてのフランス文学研究の方向性を大きく規定することになる著作群の中で、ボシュエは重要な位置を占めている。とはいえ、20世紀中期以降は、ボシュエの著作に見られる公的・規範的性格、そして

権威的性格が敬遠され、また自身の実存的な苦悩や個人的な感慨を決して安易に外に出さないボシュエの文章も個性や主観性を重視する現代の読者を惹きつけることが少なくなり、結果的にボシュエは、文学史には必ずその名が表れるが実際はあまり読まれない作家の一人となってしまっている。

29 リシャール・シモンに関する研究は少ないが、その中でも、入念な資料調査に基づき冷静かつ客観的な分析と記述を行なっているのがポール・オヴレー Paul Auvrayの*Richard Simon (1638-1712). Étude bio-bibliographique avec des textes inédits*, Paris, 1974および*Oratoriana*に発表された同著者による一連の伝記的研究である。また、同時代の資料としてリシャール・シモン『書簡選』*Lettres choisies*におけるシモン自身の自伝的な記述のほか、彼と家系を同じくし、伝記作家であったAntoine-Augustin Bruzen de la Martinièreによる記述、L. Batterel, *Mémoires domestiques pour servir à l'histoire de la congrégation de l'Oratoire,* publiés par A. Ingold et E. Bonnardet, 5 vol. Paris, 1902-1911などがあるが、極めて主観的な記述が多く見られ、その使用には注意が必要である。その他リシャール・シモンに関するまとまった研究としては、Auguste Bernus, *Richard Simon et son Histoire critique du Vieux Testament. La critique biblique au siècle de Louis XIV*, Lausanne, 1869 (Genève, Slatkine, 1969)；Henri Margival, *Essai sur Richard Simon et la critique biblique au XVIIe siècle* , Paris, 1900；Jean Steinmann, *Richard Simon et les origines de la critique biblique*, Bruges et Paris, 1960などが代表的である。

30 当時のディエップは人口３万人ほどの小都市であり海上交易で有名であった。新教徒の住民も多く、全人口の五分の一程を占めていたらしい。カトリックと新教徒の関係は比較的平和であったが、潜在的には根深い対立があり、時には暴力的な事件へと発展することもあった。リシャール・シモンの生前に起こった事件としては、1660年5月29日、教会会議を行なおうとした新教徒たちに対する学生たちの暴動が起こり、教会が略奪を受け、墓地が荒らされる事件があり、また1694年のディエップの大火の際には、新教徒たちが放火の犯人であるとのうわさが流れ騒動となった件などが記録されている。P. Auvray, *op.cit*. p. 9, n. 2.

31 一方で、家系の中で受け継がれた職人的な精神性がリシャール・シモンの学者としての当に職人的な仕事ぶりや、また彼の個人主義や独立心と関係があるのではないかと指摘する研究者もいる。P. Auvray, *op.cit*., p.10.

32 この学校は1616年に創立され、オラトリオ会の最も古い学校の一つであったが、学費が無料であり、このディエップのカトリック教徒の生徒のほとんどがこの学校に通ったとされる。P. Auvray, *op.cit*., p.11.

33 また、同校の倫理学の担当であったルネ・ド・ラ・ブリュイエール神父を通して、モリニスムの教義（16世紀スペインのイエズス会士ルイス・デ・モリーナによって体系化された恩恵論で、神は人間の業を予見し、神の恩恵は人間の業に先行するものの、人間の自由意思による同意と協働を通して初めてその恩恵は効果的な

ものになると主張し、人間の選択の自由を尊重する立場を取った）を学んだことは、その後のシモンの神学的な立場に少なからぬ影響を与えたとされる。P. Auvray, *op.cit*., p.12.

34 自身オラトリオ会士であり、その内部事情を良く知るポール・オヴレーのこうした指摘にはそれなりの重みがあるように思われる。

35 Zéphirin Sanson, « Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et les ouvrages de feu M. Simon », dans le *Journal littéraire de La Haye*, III, janv.-févr. 1714, pp. 225-230.

36 シモンは1673年にオラトリオ会総会長ド・サント＝マルト神父の着任時に各会士に求められた質問状に答える形で、1659年から1662年にかけての勉学の内容について詳細に記している。P. Auvray, *op.cit*. p. 200収録の資料参照。

37 1670年1月17日、メスにおいてユダヤ人ラファエル・レヴィが子供を殺害した容疑で火刑に処せられたことをきっかけに、反ユダヤ人キャンペーンが大々的になされたが、シモンはその際に流通した匿名の反ユダヤ文書に対抗して、その不当性を告発する文書を発表している（*Factum servant de réponse à un livre intitulé* Abrégé du procès fait aux Juifs de Metz, s.l.n.d. (Paris, 1670).）。リシャール・シモンの著作におけるユダヤ人観、ユダヤ教観についてはMyriam Yardeni, « La vision des Juifs et du judaïsme dans l'œuvre de Richard Simon », dans *Revue des Etudes juives, Historia judaica*, CXXIX, 1970, pp. 179-203.

38 *Fides Ecclesiae Orientalis seu Gabrielis Metropolitae Philadelphiensis opuscula…*, Paris, G. Meturas, 1674.

39 *Cérémonies et coustumes qui s'observent aujourd'huy parmi les Juifs. Traduites de l'italien de Léon de Modène, rabin de Venise*, Paris, L.Billaine,1681.

40 *Voyage du Mont Liban, traduit de l'italien du R. P. Jérôme Dandini*..., Paris, chez Louis Billaine, 1675.

41 ポール・オヴレーは、シモンがスピノサのこの著作を読んだのは刊行直後の1670年ではなく、1674年から1675年の間ではないかとしている（P. Auvray, *op.cit*., p. 41）。また、スピノザとリシャール・シモンの関係についてはP. Auvray, « Richard Simon et Spinoza » , dans *Religion, érudition et critique à la fin du XVII*e *et au début du XVIII*e *siècle*, Paris, 1968, pp. 201-214、さらにJohn D. Woodbridge, « Richard Simon's reaction to Spinoza's 'Tractatus Theologico-Politicus' » in *Spinoza in der Frühzeit seiner religiösen Wirkung*, herausgegeben von Karlfried Gründer und Wilhelm Schmidt-Biggem, Heidelberg, L. Schneider, 1984, pp. 201-226を参照。

42 ボシュエに関する研究は多いが、とりわけ伝記的側面に関する研究については、フランスの宗教界に及ぼした影響力の大きさと複雑さも手伝って、冷静で客観的な資料の検討および考察に基づく決定的で総合的な研究はまだ現れていない。そうした中でもボシュエの全体像を扱ったものとして優れているのが、Alfred Rébelliau, *Bossuet*, Paris, Hachette, 1900である。またEugène Levesqueによる

Dictionnaire d'histoire et de géographie ecclésiastique, t. IX, Paris, Letouzy et Ané, 1937, col. 1337-1391におけるボシュエの項目の記述は手堅いものであり、さらには『ボシュエ書簡集』の第15巻に収録されている「ボシュエの生涯」も参考になる。また雑誌*Revue Bossuet*に発表された様々な伝記的情報、それらをもとに『書簡集』の各書簡に付された注もボシュエの生涯に関する情報を豊富に提供してくれる。伝記というより聖人伝に近いものとして、ボシュエの秘書であったフランソワ・ルディユFrançois Ledieuの書いた『ボシュエの生涯と著作に関する覚書と日記』(*Mémoires et Journal sur la vie et les ouvrages de Bossuet*, éd. abbé Guettée, t.I, Paris, Didier, 1856, pp.1-216および『ボシュエの最晩年。日記』(*Les Dernières Années de Bossuet. Journal*, nouvelle éd. Charles Urbain et Eugène Levesque, 2 vol., Bruges-Paris, Desclée De Brouwer, 1928-1929) が側近の視点からの貴重な情報を与えてくれるが、その利用には注意が必要である。さらにはまたLouis-François de Bausset, *Histoire de J.-B. Bossuet, évêque de Meaux, composée sur les manuscrits originaux*, 4 vol., Versailles, J.-A. Lebel, 1814やAmable Floquet, *Etudes sur la vie de Bossuet jusqu'à son entrée en fonction en qualité de précepteur du Dauphin (1627-1670)*, 3 vol., Paris, Firmin-Didot, 1855および*Bossuet précepteur du Dauphin, fils de Louis XIV, et évêque à la Cour (1670-1682)*, Paris, Firmin-Didot, 1864なども現在では失われてしまった資料を活用している点で参照に値する。また、2004年にはボシュエの没後300年を記念した国際学会が複数開かれ、その成果が出版された：*Bossuet à Metz (1652-1659) . Les années de formation et leurs prolongements. Actes du colloque international de Metz (21-22 mai 2004)*, éd. Anne-Elisabeth Spica, Berne etc., Peter Lang, 2005 ; *Bossuet. Le Verbe et l'Histoire (1704-2004). Actes du colloque international de Paris et de Meaux, pour le troisième centenaire de la mort de Bossuet*, publiés par Gérard Ferreyrolles, Paris, Honoré Champion, 2006。また同年モーのボシュエ博物館が企画した展覧会のカタログも充実している (Musée Bossuet de Meaux, *Bossuet. Miroir du Grand Siècle. Exposition du 3 avril au 1e août 2004*, Paris, Phileas Fogg, 2004)。さらに最新の研究動向については毎年刊行されるボシュエ研究誌*Les Amis de Bossuet* (bulletin de l'Association «Les Amis de Bossuet »)の « Travaux récents sur Bossuet »を参照。本稿においては基本的に、過去の諸研究を批判的に検証した上でバランスの取れた著述を行なっているGérard Ferreyrolles, Béatrice Guion, Jean-Louis Quantin, *Bossuet*, Paris, PUPS, 2008に従う。

43 ルイ14世の長男として1661年11月1日に生れ、王位に就くことなく1711年に世を去ったこの王太子ルイの無能ぶりについては様々な記録が残されているが、特にサン＝シモンの『回想録』には、ボシュエをはじめとする最高の教師に囲まれていたにも関わらず、彼等の努力を無にしてしまった王太子についての容赦ない記述がある。Saint-Simon, *Mémoires*, éd.Y. Coirault, Paris, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 1982-1988, 8 vol., tome IV, p.79およびp.81を参照。

44 この事件に関するシモン自身の証言としては、*Bibliothèque critique, ou, Recüeil de diverses pièces critiques : dont la plûpart ne sont point imprimées, ou ne se trouvent que très-difficilement, publiées par Mr. de Sainjore qui y a ajoûté quelques notes*, A Amsterdam, Chez Jean Louis de Lormes, 1708（以下、*BC*と略す）, t. II, Chapitre XXXI, pp.446-447 ; « Lettre IX au R. P. D. B. [=P. du Breuil] », in *BC*, t. IV, pp. 61-71を参照。またボシュエの証言としては « Lettre à M. de Malézieu », in *Correspondance de Bossuet*, éd. Charles Urbain et Eugène Levesque, 14 vol., Paris, Hachette, 1909-1925（以下、*CB*と略す）, v. XIII, pp. 308-315、発禁処分に関わった警視総監ラ・レニー、大法官ミシェル・ル・テリエらの証言 については « Lettre de La Reynie à Bossuet », in *CB*, v. XIII, p. 416、また同書のAppendice VI, C-E, pp. 540-542に収録されている彼らの複数の書簡の中に見ることができる。

45 P. Auvray, *op.cit*., pp.45-53.また、この事件に関して17世紀フランスにおける検閲システムの問題を中心に論じているものとしてはPatrick J. Lambe, “Biblical criticism and censorship in Ancien Régime France: the case of Richard Simon”, *Harvard Theological Review*, 78, 1985, pp. 149-177がある。この時期の出版統制の概要については、二宮素子「ルイ十四世治下の出版統制―治世後半のパリを中心に―」（『史學雑誌』第79編第7号、1970年、pp.1063-1096）、『フランス絶対王政下の書物と検閲』（一橋大学社会科学古典資料センター Study Series. No. 2、1982年）のほか、Anne Sauvy, *Livres saisis à Paris entre 1678 et 1701. D'après une étude préliminaire de Motoko Ninomiya*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1972などを参照。

46 この禁書を命じる閣議決定を記した文書はフランス国立公文書館Archives Nationalesに保管されている (*Recueil des Arrests du Conseil d'Etat du Roi, des six premiers mois de 1678*, [E.1792], f° 458 r°) ほか、フランス国立図書館にも細部が少し異なるものが保存されている（BNF [fr. 21743] f° 172）。

47 1683年、ローマ法王庁の検閲聖省も『旧約聖書の批判的歴史』を断罪した。1680年には押収を逃れた1678年版の不正確な写しをもとに間違いだらけの版がオランダの出版業者エルゼヴィール Elzevierによってアムステルダムで第二版として出版された。その版が国外で流通するのを好まなかったシモンは1685年のロッテルダムのReinier Leers社からより正しい版を出版する。

48 この書は出版されなかったが、その内容は後に出版される*Réponse de Pierre Ambrun ministre du saint Evangile à l'Histoire critique du Vieux Testament, composée par le P. Simon de l'Oratoire de Paris*, Rotterdam, chez Reinier Leers, 1685の中に反映されている。

49 このシモンとボシュエの会談については当事者たちの証言のほか、同席したウーゼブ・ルノドEusèbe Renaudotによる証言（*Perpétuité de la foi de l'Église catholique*, éd. de 1782, tome V, p.624, pp.628-629）もある。詳しくはP.Auvray, *op.cit*., p.78 ; René-Marie de La Broise, *op.cit*., pp.342-344を参照。

50 *Ibid*., p. 49. オラトリオ会からの除名決定を記録した文書はフランス国立公文書館に保管されている（A.N., MM 582, p.151）。

51 Richard Simon, « Lettre IX au R. P. D. B. [=P. du Breuil] », in *BC*, t. IV, pp. 61-71.

52 P. Auvray, *op. cit*., p. 51.

53 *Ibid*., p. 52.

54 « J'en fus averti très à propos par un homme bien instruit, [...]. Il m'envoya un index et ensuite une préface, qui me firent connaître que ce livre était un amas d'impiétés et un rempart du libertinage », in *CB*, v. XIII, p. 309. しかしこのボシュエの証言は事件から20年以上たった最晩年のものであり、発禁処分に関わった警視総監ラ・レニーの回想にはこの序文の話は表れないことや（« Mémoire sur ce qui fut fait, en 1678, contre la Critique de l'Ancient Testament de Richard Simon et le jugement qu'en portèrent les protestants.», in *CB*, v. XIII, pp. 416-417）、事件後も長きにわたってシモンとの論争が様々な形で続いたことを考えると、ボシュエの記憶違いの可能性もあり、本人の証言とはいえ必ずしも確かなものとは言えない。

55 この目次の全訳を附録として本稿の末尾に掲げておく。

56 ボシュエの『世界史論』における神学的歴史観についてはGérard Ferreyrolles, Béatrice Guion, Jean-Louis Quantin, *Bossuet*, Paris, PUPS, 2008の第5章、特にリシャール・シモンとの関係についてはpp.122-127を参照。

57 « L'histoire que Moïse avoit écrite et où toute la loi étoit renfermée, fut aussi partagée en cinq livres qu'on appelle Pentateuque, et qui sont le fondement de la religion. », Bossuet, *Discours sur l'Histoire universelle, in Œuvres complètes*, éd. François Lachat, 31 vol., Paris, Louis Vivès, 1864, v.24, p. 272.

58 « Le moment étoit venu où la vérité mal gardée dans la mémoire des hommes, ne pouvoit plus se conserver sans être écrite ; et Dieu ayant résolu d'ailleurs de former son peuple à la vertu par des lois plus expresses et en plus grand nombre, il résolut en même temps de les donner par écrit.

Moïse fut appelé à cette ouvrage. Ce grand homme recueillit l'histoire des siècles passés[...]», *ibid*., p. 394.

59「モーセの伝承はあまりも明白で、またあまりにもよく引き継がれてきたものであって、いかにわずかの偽りをもたらすのも許さないほどであること、またそれが引き継がれてきた時代は互いにあまりに緊密に結びついていて、文書の置き換えをおこなうことのできるようないかなる継ぎ目や空白も残さなかったことを認めよう。しかし、ここでどうして文書の置き換えなどという言葉を口にしようか。およそ良識を持つものであれば、それを考えることすらするべきではなかろう。モーセの律法と五書によってすべては満たされ、すべては治められ、すべてはいわば明らかにされるのである。」« Avouons que la tradition de Moïse est trop manifeste et trop suivie pour donner le moindre soupçon de fausseté, et que les temps dont est

composée cette succession se touchent de trop près pour laisser la moindre jointure et le moindre vide où la supposition pût être placée. Mais pourquoi nommer ici la supposition ? Il n'y faudroit pas seulement penser, pour peu qu'on eût de bon sens. Tout est rempli, tout est gouverné, tout est pour ainsi dire éclairé de la loi et des Livres de Moïse.», *ibid*., p. 559.

60 « Mais il [R.Simon] n'écrit, dit-il, que pour les savans qui en peuvent tirer quelque avantage. Pourquoi donc, puisqu'il y a parmi nous une langue des savans, ne parle-t-il pas plutôt en celle-là ? Pourquoi met-il tant d'impiétés, tant de blasphèmes entre les mains du vulgaire et des femmes qu'il rend curieuses, disputeuses et promptes à émouvoir des questions, dont la résolution est au-dessus de leur portée.», Bossuet, *Défense de la tradition et des saints Pères*, partie I, livre III, chapitre VIII, in *Œuvres complètes*, éd. François Lachat, Paris, Louis Vivès, 1862, v.4, p. 87.

61 本稿末尾の附録『旧約聖書の批判的歴史』目次の第3巻を参照。

62 Bossuet, *Défense de la tradition et des saints Pères*, partie I, livre III, chapitre VII, in *Œuvres complètes*, éd. François Lachat, Paris, Louis Vivès, 1862, v.4, pp.86-87を参照。

63『旧約聖書の批判的歴史』第3巻第8および第9章。

64 « J'ai peur qu'il [R.Simon] n'ait pas assez vu les conséquences de la doctrine qu'il a enseignée », « Lettre de Bossuet au R. P. de Sainte-Marthe, général de l'Oratoire », in *CB*, v. II, p.65.

65 注49参照。

66 この書き換えや再出版の提案については上記のルノドの証言の他、1702年のボシュエのド・マレジウ氏宛ての書簡（« Lettre de Bossuet à M. de Malézieu », in *CB*, v. XIII, p.311）やベルタン師宛ての書簡（« Lettre de Bossuet à l'Abbé Bertin », *ibid*., p.316）に記されている。

67 この目次の翻訳にあたって使用した版はフランス国立図書館所蔵の[*Histoire critique du Vieux Testament*], Paris, Vve Billaine,1678, In-4°, pièces limin., 680 p. et la table, (BNF [A-3498]) である。1678年版は、上でも述べたようにタイトル・ページと王への献呈の辞、正誤表を含む最後の折り丁が完成する前に押収されたため、いきなり序文から始まっている。

本稿は平成20年度～平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金（【基盤研究（C)】研究課題「歴史批判と本文批評：聖書資料説の起源と「批判」概念の発生」）による研究成果の一部である。

Richard Simon et Bossuet (1) La suppression de l'*Histoire critique du Vieux Testament* de Richard Simon.

Le conflit entre l'oratorien Richard Simon et Jacques-Bénigne Bossuet, provoqué par la suppression de l'*Histoire critique du Vieux Testament*, ouvrage fondateur de l'exégège biblique critique, n'est pas une simple anecdote dans l'histoire des études bibliques du XVIIe siècle ; en effet il contenait plusieurs aspects bien influents - philologique, politico-théologique, historique, et stylistique, entre autres- qui orienteraient ou plutôt limiteraient désormais l'approche du texte biblique chez les savants et les hommes de lettres français des prochaines générations. La suppression successive, sous la pression de l'évêque de Meaux, des ouvrages de notre prêtre oratorien (*l'Histoire critique du texte du Nouveau Testament, l'Histoire critique des versions du Nouveau Testament, l'Histoire critique des principaux commentateurs du Nouveau Testament* et une nouvelle traduction française du Nouveau Testament, appelée le *NT de Trévoux*) a réussi à écarter les lecteurs français des études philogiques critiques ou « scientifiques » de la Bible et à les laisser en revanche se faire charmer par le beau style de l'ancien précepteur du Dauphin, parsemé de citations bibliques élégamment tournées en français. Ce présent article fait partie d'une étude qui consiste à examiner les conséquences apparentes et sous-jacentes de cette affaire entre Richard Simon et Bossuet qui a duré pendant plus de vingt-cinq ans, du point de vue de l'histoire des études bibliques mise en rapport avec celle du style littéraire. Il porte principalement sur la période qui couvre les années de formation de ces deux savants catholiques et le début de leur conflit après la suppression de l'*Histoire critique du Vieux Testament* en 1678.

Richard Simon and Bossuet (1)
Suppression of the *Histoire critique du Vieux Testament*

Gengo ITO

Keywords: Biblical studies, Historical criticism, 17th Century, French literature,